

The Dynamics of Japanese TE-SHIMAU in Semantics

Chih-yuan Lin.

Assistant professor, Department of Applied Japanese, Hsing Kuo University of Management.

Abstract

This paper is intended to delve into the dynamics of Japanese TE-SHIMAU in semantics from the perspectives of cognitive linguistics and semiotics. Specifically, it aims to observe how human beings manage to use languages to express an infinite variety of ideas by applying a definite number of signs. It lays emphasis on how Japanese verbal SHIMAU changes to TE-SHIMAU as a compound verb in the process of grammaticalization through metonymy and semiotics.

Keywords : grammaticalization , metonymy , denotation , connotation

日語「テシマウ」語義變化的動力

林志原

興國管理學院應用日本語系專任助理教授

摘 要

從認知語言學及符號學的觀點來探討「テシマウ」的語義變化的動力。本文主要的目的是觀察人類語言如何應用有限的符號表達無窮的概念，觀察重點在於日語動詞「しまう」經語法化之後變成補助動詞「テシマウ」。在語法化的過程中，從本動詞「しまう」到補助動詞「テシマウ」之間的語義轉化過程。並透過換喻、符號學等觀點來探討「テシマウ」語義變化的動力。

關鍵詞：語法化、換喻、直接意指、引申意指(涵指)

日本語における「テシマウ」の意味変化の ダイナミズム

林志原

興国管理学院応用日本語学科専任助理教授

要 旨

認知言語学及び記号論の観点から、「テシマウ」の意味変化のダイナミズムを
探求する。本稿の目的は人間がどのように有限の言語記号を用いて、無限の思考概念
を表現するかについて、本動詞「しまう」とそれが文法化された「テシマウ」に絞っ
て、観察することである。主に認知言語学の観点に立って、文法化、メトニミー、記
号論によって、「テシマウ」の意味変化のプロセスを検討する。

キーワード：文法化、メトニミー、表示義、共示義

一、はじめに

現代日本語における「テシマウ」の先行研究では、「テシマウ」¹の意味²は終了・限界達成というアスペクト的意味と話し手の感情、評価などのモダリティ的意味とが含まれている。金田一（1950、1955）では、「テシマウ」は主にアスペクト表現の一つであり、高橋（1969）、吉川（1973）もそれに従って、「テシマウ」の基本的意味はアスペクト的意味として扱われており、モダリティ的意味は副次的なものとして求められている。ただし、藤井（1992）では、「テシマウ」は感情・評価の意味のほうがより一般的であり、限界達成はむしろ部分的、或いは付随的であると述べている。

本稿では、人間がどのように有限の言語記号を用いて、無限の思考概念を表現するかについて、研究対象を日本語の動詞「しまう」と文法化された補助動詞「テシマウ」に絞って、その

記号表現に対応している記号内容が拡張されていくプロセスを観察し、主に認知言語学の立場に立って、「テシマウ」の意味変化のダイナミズムを調べることにする。

国文法の分類によって、「テシマウ」は補助動詞という文法的カテゴリーに分類される。その点から見ると、「テシマウ」は前接動詞に深く関わっていることが分かる。よって、「テシマウ」の前に付いた動詞はどのように「テシマウ」の意味に影響を与えるかについて検討する必要がある。しかし、「テシマウ」の前接した動詞だけに重点を置くことは「テシマウ」の意味を見出すことが出来ない。従来の研究では、「テシマウ」に前接した動詞の素性を分析して、詳しく検討したが、画期的な結果が出てこない。例えば、同じ動詞（飲む）の場合では、文脈によって異なる意味になってしまう。

- (1)、喉が渴いたので、買ったばかりの缶コーヒーを一口で飲んでしまった。
- (2)、間違えて、隣に坐っている人の缶コーヒーを飲んでしまった。

(1)の「飲んでしまった」の意味は量的な完了の意味を表すが、(2)の「飲んでしまった」の意味は失敗した気持ちを表わす。しかし、(3)の場合はどうな

¹ 小論では、「テシマウ」を論じる時、引用を除いて、「テシマウ」をカタカナの形で表記し、統一することにする。

² モダリティとは学者によって、ムード、気持ちなどの用語と区別されて扱われる用語である。仁田（1989）はモダリティについて、「現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表態度一文の対象的な内容に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分である。」と述べている。

るであろうか。

(3)、喉が渴いたので、買ったばかりの缶コーヒーを一口で飲んでしまった。コーヒーに弱い私は今夜たぶん寝られないでしょう。

(3)の場合では、単なる量的完了ではなくて、後悔などのモダリティも見られる。そこで、本稿では「テシマウ」の前接した動詞の語彙的素性に焦点を置かず、その代わりに記号論の観点によって、「テシマウ」の中で「しまう」の意味はどのように「テシマウ」の意味に影響を与えるかを調べることにする。

二、研究方法

「テシマウ」の研究においては、アスペクト的意味を先に取り出して扱う。国文法では、「テシマウ」を補助動詞のカテゴリーに分類しているが、補助動詞というのは文字通りに、動詞を補助する役割を演じることだと思われる。したがって、「テシマウ」の意味を求める際、「テシマウ」の前接した動詞の意味素性を分析することによって、「テシマウ」の意味を解明する方法は理屈から見れば、もっともだが、結果として優れた成果があまり挙げられない。この結果には仮説以外の要因が関与しているのではないであろうか。本稿では文法化、メトニミー、

記号論などの観点から「テシマウ」を検討することにする。

上のように、「テシマウ」に関わっている様々な問題があり、本稿では、それらの問題を以下のようにまとめる。

- 1、「テシマウ」は、アスペクト的意味、モダリティ的意味の用法を有する。つまり、「テシマウ」という一つの形式で二つの意味概念を担われていることである。本稿では、より包括的に「テシマウ」の本質を捉えることに力点を置くことにする。
- 2、従来、「テシマウ」の意味を論じているものは、主に「テシマウ」の文末表現を中心として検討しているが、本稿では、文末表現だけではなく、従属節または連体修飾などの表現も観察の範囲に入れることにする。
- 3、動的記号論の観点によると、記号形式と記号内容との二項対立関係は固定の関係ではなく、言語使用者が常にコンテキストによって、有限の記号から無限の意味が産出される。そこで、「テシマウ」に関する言語の使用の慣習化に伴って、メトニミー効果が生じる意味変化のプロセスも研究の範囲に入れることにする。

三、記号論と「テシマウ」の意味

(一)、動的な記号論

記号論の流れについて、有馬(2003)では、「記号論 (semiotics) は古代ギリシャの「徴候学」に始まり、ソシュール (Saussure、1857-1913) とパース (Peirce、1839-1914) によって、現代の記号論の基礎が確立された。ソシュールの記号論は記号表現 (シニフィアン) と記号内容 (シニフィエ) との二項対立関係によって、閉じられた構造である静的な記号論であるのに対して、パースの記号論は記号と対象を結ぶ動的な解釈者を持つ開かれた構造である動的な記号論である。」というふうにまとめている。(有馬、2003、p124-6参照)

日常生活の中で我々はほぼ無意識的に社会に決められた言語を用いて、自由自在にコミュニケーションをしているが、誤解などが起こることもよくある。それは多くの場合、話し手が送信した「コード」と聞き手が受けた「コード」の中に、ずれが出てくるのが原因であろう。もちろん、そのずれを修正したら、正確に伝達機能を働かせることができる。もし「コード」において、記号表現と記号内容が一对一であるならば、より理想的な伝達ができるであろう。しかし、自然言語において、記号表現と記号内容との対応が一对一であることはほぼ不可能だと思われる。もし「記号表現と記号内容との対応が一对一」の場合に成ると、人間が使わ

れた言語形式が想像できないほど、膨大な量になる。人間の無限の想像や概念などを有限な言語形式を使って表現するとき、決められた言語記号の現れた言語内容の枠を超えることはすこしもおかしくないと思われる。

(二)、「テシマウ」の意味とメトニミー効果

実は我々の言葉の創造力は、思ったより頻繁に身の回りで絶えず、行われている。そう考えれば、言語記号の枠を破ることは詩人の私有物だけではなく、言語使用者の共有物とも言えるであろう。その言語記号の枠を超える言語表現がよく使われるのが比喻である。例えば、Lakoff(1987)では、メトニミー・モデルの章では、このような顕著な事例を挙げて、「シカゴでのDC-10の墜落事故がマスコミの報道によって、広く知れ渡って、DC-10には乗ろうとせず、他の機種を選ぶ人がたくさん出てくるということがあった。実際には、他の機種のほうがDC-10よりも安全性が全般的に劣るという記録があったのに、そういう人々は、安全性の判断に関して、墜落したDC-10という顕著な事例を用いてDC-10のカテゴリー全体をメトニミー的に表していたことになる。」とメトニミー・モデルを説明した。

上の例を見ると、一般的に言えば、

DC-10という言語記号に対応している記号内容は飛行機の機種であるのに、事故の報道によって、DC-10が危険な概念に写像されて、このように簡単に言語の決められた枠を超えることが見られる例である。

DC-10という記号はもともとそれなりの概念を表わしているが、顕著な事例を介して、メトニミー作用を行って、そのDC-10の概念を変更していくことが見られる。したがって、記号とそれに対応している概念との関係は、常に使用頻度（マスコミの報道など）や顕著な事例によって、変化していることと思われる。例えば、「テシマウ」は本動詞「しまう」のプロトタイプの意味によって、動機づけられて「事象の消滅」という「終わり」のアスペクト的意味と「もともと空間に存在している事象や状態の消滅によって、認知主体は出来事や状態が心的な想定から外れる気持ち」というモダリティ的意味を表すことである。このように、本動詞「しまう」から受け入れた「アスペクト的意味」と「モダリティ的意味」は「テシマウ」という形態素（単位）に同時に存在しているにもかかわらず、言語の使用の慣習化や顕著な事例によって、メトニミー効果が起きて、「モダリティ的意味」に偏っていく傾向が見られる。例えば、以下の例を見てみよう。

- (4)、この年の十二月三十一日、虚子氏に与えた手紙に「小生やむをえざる儀に立ち至り現に一小説を書きつつあるなり。（略）」とあるから、小説の方が進行せぬうちに、二十四年は暮れてしまったものと見える。（評伝正岡子規、p61）
- (5)、俺はしゃがんだまま線路の先を見た。無論、恵の乗った電車は行ってしまった後だ。（変身、p203）

上の例では、「暮れてしまった」「行ってしまった」という構造の中に、「動詞+て+しまった」というように分けられるが、この例文の「しまった」は本動詞「しまう」の「終り」の意味として捉えることができる。ただし、このように本動詞「しまう」の「終り」の意味はちょうど補助動詞の「テシマウ」というアスペクト的用法と重なっている。ただし、普通動作や状態が終わるという段階になって、言語主体は容易に残念や気がすまないなどの気持ちを伴うことが多いので、「テシマウ」という記号に対応している概念はもともとの終りの意味からモダリティ的意味が生じて、その使い方の多用によって、次第にモダリティ的意味がアスペクト的意味より前景化することになると思われる。例えば、以下の例を見てみよう。

- (6)、「正常とされる範囲を逸脱した」
とか「精神が病んでしまった」と
か、もっと柔らかい言い方はたく
さんある。だが、それらはみんな
結局のところ同じ意味だ。親父は
あるとき、自分を取り巻く現実の
重さに耐えきれなくなって、狂っ
てしまった。（天使の卵、p15）
- (7)、「あんたのせいでお姉ちゃんは死
んじゃったのよ！」
夏姫はうっと嗚咽をこらえると、
よろめきながら僕の横を走り抜
け、病室から飛び出していった。
（天使の卵、p187）

上の「狂ってしまった」「死んじゃった」のように、日常生活の会話の中に「テシマウ」はよく悪い意味を持っている動詞と結合するので、そのようにしたら「テシマウ」に対応している概念は次第に悪いイメージと繋がっていることになる。このような現象と上の挙げたDC-10の例とは非常に合致すると思われる。多くのDC-10の飛行機の中にも一隻のDC-10の墜落事故があり、それがマスコミの報道によって、一隻のDC-10に対応している概念が全体のDC-10の概念を塗りかえて、いわゆるメトニミー効果が生じることになってしまった。「テシマウ」という概念は「テシマウ」がよく悪い意味を持っている動詞に付いていることによって、

「テシマウ」に対応している概念も変わってきて、悪いイメージのモダリティ的意味になったことが考えられる。

- (8)、孤独が生暖かい闇の汁のようにふたたび彼を浸した。これはもうみんな終わってしまったことなのだ、と彼は思った。もう何をしたところで、全ては終わってしまったのだ。（レキシントンの幽霊、p140）
- (9)、他の受刑者が漫画や週刊誌ばかり借りるのに対して、彼はその手のものは一切借りていこうとはしなかった。入所して二ヶ月もすると、刑務所にある書物を大方読破してしまい、官本の種類を増やすようにと要求した。（海峡の光、p60）
- (10)、ボーロとか麩菓子とか、昔の素朴なお菓子が特にコーナーを設けられて売られている。
その「リバイバル」のなかに麦チョコがあった。思わず買ってしまった。
（猛スピードで母は、p9）

上の「終わってしまった」「読破してしまい」の「テシマウ」はアスペクトの意味もモダリティの意味もあるが、「みんな」「大方」という修飾語が「終わってしまった」「読破してし

まい」を修飾しているので、「テシマウ」がないのも文の意味がほぼ同じである。「終わる」「読破する」という動詞の量や質的「終わる」の段階に置いていることを表すことができる。そこで、この「テシマウ」はアスペクトの意味より、むしろモダリティの意味のほうが適切だと思われる。「買ってしまふ」と前の「狂ってしまった」や「死んでしまった」の例と違っており、単に前の単語にかかわっているのではなく、文全体の意味にかかわっている。「テシマウ」の意味は前の残念の意味から「コントロールができない」というモダリティの意味に移行してきた。

(11)、私が近づくと、

「ひゃーあ、お久しぶり！すっかり女っぽくなっちゃって、近よりがたいったらないわ。」

大声で言った。恥ずかしさより、なつかしさにじんときた。(キッチン、p113)

上の「女っぽくなっちゃって」は「買ってしまった」と違っており、「買ってしまった」の「テシマウ」の意味は「コントロールができない」気持ちを表すことであるが、「女っぽくなっちゃって」は「女っぽくなる」という状態にたいして、認知主体(話し

手)はその状態が想定を外れたモダリティの意味を表わす標識である。このように、実質的な意味が上のほかの例と比べると薄くなってくると思われる。

ここまで述べてきたように、「テシマウ」には四つの段階が見られる。初めは(4) (5)のように、本動詞「しまふ」の「終わり」という意味と補助動詞「テシマウ」のアスペクトの意味が重なっている。次は、「終わり」の意味が容易に「おしまい」「しまった」などの残念などのモダリティの意味を生じやすい。そして、(6) (7)のように、「死んでしまった」「狂ってしまった」などの「悪い意味を持っている動詞」との結合する頻度が多くなったことによって、「テシマウ」に対応している概念も変化してくることになった。さらに、(11)のように「テシマウ」は次第に前の動詞との関係が薄くなってきて、一つの記号として独立して、もともとの「想定から外れた」という不適當などのモダリティの意味を表わす記号になったことが見られる。

記号と記号に対応している概念は常に固定していることではなく、動的なメカニズムとしてとらえる必要がある。言語研究において、このようにことばの変化しつつあるという現象を無視することはできないと思われる。また、記号とその記号に対応している

概念の変更について、記号論の表示義から共示義へ移行する見方に非常に当てはまっていると思われるので、以下では、表示義と共示義との関係を考えながら、本動詞「しまう」と補助動詞「テシマウ」の意味の変更を検討していくことにする。

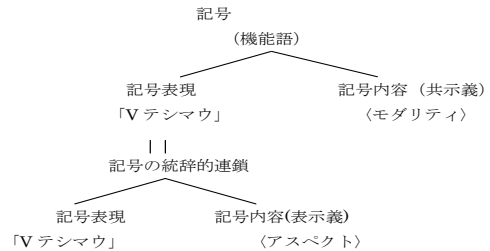
(三)、表示義と共示義

池上(1994)では、ことばの意味は「表示義」(denotation)と「共示義」(connotation)という二つのレベルで作用しうることと述べている。

「表示義」、「共示義」について、便宜上、池上の挙げた例を使って、述べていこうと思う。「ふつうの言語記号としてのレベルでの記号内容は「表示義」、より高次のレベルの記号としての記号内容は「共示義」と呼ばれることがある。「共示義」は「表示義」を踏まえて意味作用を行うが、逆は必ずしも真ではない。」と池上(1994)が述べている。この現象は語彙レベルに留まらず、統語レベルにも見られる。例えば、池上(1984)の例を見てみよう。日本語の「首を切る」には、「共示義」と「表示義」の二つのレベルがはっきり見られる。その「首を切る」というイディオム化はまだ途中の段階に位置しているので、「斬首」と「解雇」の二つの意味を持っていることによって、特別の文脈がないと、正確に

意味を読み取ることができない。

本稿で論じてきた「テシマウ」を「共示義」と「表示義」のレベルにおいて、どんな現象が観察できるだろうか。



上の図の中に見た通り、「Vテシマウ」という記号表現はアスペクトの表示義とモダリティの共示義に対応している。だが、本動詞「しまう」はどの位置に置かれているかという疑問も出てくるかもしれない。一般的に言えば、本動詞は一つ以上の意味(多義語)を持っているが、機能語に派生している段階において、決してすべての意味をそのまま「Vテシマウ」という機能語に埋め込まれているのではない。もしそのようにするとその機能語の意味は複雑に成りすぎるので、実用できない状態になってしまうであろう。しかし、本動詞が多義語の場合ならば、その多くの意味の中のどの意味が機能語の意味に派生してくるかが問題になる。

多義性をいかにして捉えるかに関する研究では、多くの学者が様々な方法を用いて、検討してきたが、それ

ぞれの方法、定義、用語などがまだ統一されていない。例えば、服部四郎（意義素）、飛田良文/浅田秀子（意味の核）、国広哲弥（現象素）、田中茂範（コア）、小西友七（中核的意味）、田村年（基本的意味）、松中完二（中心的概念）などが見られる。オックスフォード英語辞典（The New Oxford Dictionary of English、1998）では、多義構造を最初に中核となる意味（core meaning）を示した上で、次いで派生義を示すという記述法を採る。オックスフォード英語辞典では、中核となる意味について次のように説明している。便宜上、松中（2005）の訳を引用する。

中核的意味とは、現代、その語が一般に用いられる場合の最も文字通りの意味を指す。これは、必ずしも最も古い意味ということではない。何故なら、意味は時の変遷と共に変化するからである。これはまた、必ずしも使用頻度の最も高い意味ということでもない。時によっては、比喩的意味の頻度が最も高い場合があるからである。中核的意味とは、英語の母国語話者たちが文字通り、中心的な意味として使用されていることを認めている意味に他ならない。

中核的な意味はまた、他の関連する派生義の意味に扉の役目を果たす。それ

らの派生義は、互いが一つの確固とした概念の結びつきを有し、中核的な意味のもとで集団を形成する。（松中、2005、p8、下線：引用者）

上に挙げた中核的な意味から考えると、「テシマウ」の中核的な意味は「終わる」の意味であることがとらえられる。つまり、本動詞「しまう」が多義語であるにもかかわらず、「終わる」の意味しか「テシマウ」という機能語に派生していない。また、池上（1994）では、「共示義」と「表示義」について、以下のようにまとめられる。

「ことば」の場合、「表示義」は社会習慣としてある程度の安定性を有しているのに対して、「共示義」はコンテキストに影響されるなどの点で、必ずしも安定したものではない。また修辭によって、どのような共示義を持つかが操作されることがある。「共示義」の場合はその背後に「表示義」が重なって、いわば、二重写しになるのに対して、「表示義」の場合はそのようなことにはならない。（池上、1994、p 67-68）

上のような「共示義」と「表示義」の相違点を「テシマウ」のアスペクト意味とモダリティ意味に例えれば、どうであろうか。「テシマウ」のアスペクトの意味は比較的に単純に捉えるこ

とができ、完了の意味を表す。それに対して、「テシマウ」のモダリティの意味は複雑な意味を表現しているので、時にコンテキストによって語用論的推論を行わないと、正確に意味が読み取れない。「テシマウ」のモダリティ的表現は比較的安定してないので、時にアスペクトの意味とモダリティの意味が絡み合っていることが見られる。「テシマウ」の文法化過程をイディオム化に例えれば、どんな現象が予測できるかについて考えてみよう。イディオム化について、池上(1984)が「イディオム化は、この本来共示義であったものがもともとの表示義を追放してそれ自身が表示義の地位を占めるに至った時に完了する、と考えることができる。」と述べている。「テシマウ」の場合、いわゆる文法化への途中の段階にあるので、「アスペクトの意味」(表示義)と「モダリティの意味」(共示義)の二つ段階の意味を有している。実際の使用状態を見ると、「モダリティの意味」の使用頻度が比較的高くなってきている。従来、国語学者が「テシマウ」のアスペクト意味に力点を置いて研究してきたが、最近の研究者の観察によると、「テシマウ」のモダリティの意味がほぼ全般的に「テシマウ」の意味表現に埋め込まれているとの議論がある。この現象から考えると、時代につれて、「テシマウ」の

デフォルト値(default value)が次第に「アスペクトの意味」から「モダリティの意味」へ移行してきた、また、「アスペクトの意味」の一義的表現から「モダリティの意味」の多義表現に派生してきたことが考えられる。

四、おわりに

「テシマウ」の意味は主にアスペクトの意味であろうか、モダリティ的な意味であろうかという論争もよく見られる。本稿では、プロトタイプに基づくカテゴリー理論によって、「テシマウ」の意味はプロトタイプの意味から周辺の意味に移動していき、アスペクトの意味とモダリティの意味が絡み合っているので、はっきり分けることが出来ないと把握する。本稿の観察によると、その本動詞「しまう」と補助動詞「テシマウ」の間にはっきり分けることができず、一つの連続性が認められる。

また、構成性原理からゲシュタルトまでの一連のプロセスの中に、意味論レベルにおいて、「あるものをほかのところに片付ける」という意味から「終わる」という意味まで派生してきた本動詞「しまう」の意味は補助動詞「テシマウ」というゲシュタルトのアスペクトの意味に繋がっていることが認められる。さらに、その形式が表わされている概念は変化しつつあり、時

間的表現（アスペクト）から心理的表現（モダリティ）に移行していく現象が見られる。

「テシマウ」のスキーマ的意味はアスペクト的意味とモダリティ的意味が一つの形式にまとめられており、モダリティ的意味がアスペクト的意味より前景化していると思われる。本動詞「しまう」から「テシマウ」までを一つの連続性として捉える点から見ると、「テシマウ」の研究史にも非常にあてはまっていると思われる。

参考文献：

- 有馬道子(2003)「記号論」、『現代の言語学の潮流』、山梨正明・有馬道子編、東京：勁草書房。
- 池上嘉彦(1984)『記号論への招待』、東京：岩波新書。
- 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光(1994)『文化記号論』、東京：講談社学術文庫。
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」。(『日本語動詞のアスペクト』、東京：むぎ書房、1976年。再録。)
- 金田一春彦(1955)、「日本語のテンスとアスペクト」。(『日本語動詞のアスペクト』、東京：むぎ書房、1976年。再録。)
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』、東京：ひつじ書房。
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』、東京：むぎ書房。
- 高橋太郎(1969)「すがたともくろみ」。(金田一春彦、編、『日本語動詞のアスペクト』、東京：むぎ書房、1976年。再録。)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味II』、東京：くろしお出版。
- 仁田義雄(1989)「現代日本語のモダリティの体系と構造」、『日本語のモダリティ』、仁田義雄など編、東京：くろしお出版。
- 藤井由美(1992)「『てしまう』の意味」、『ことばの科学5』、言語学研究会編、東京：むぎ書房。
- 松中完二(2005)『現代英語語彙の多義構造—認知論的視点から—【理論編】』、白桃書房。
- 山梨正明(1995)、『認知文法論』、東京：ひつじ書房。
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』、東京：くろしお出版。
- 湯本久美子(2004)『日英語認知モダリティ論—連続性の視座』、東京：くろしお出版。
- 吉川武時(1973)「現代日本語動詞のアスペクトの研究」。(金田一春彦編、『日本語動詞のアスペクト』、東京：むぎ書房、1976年。再録。)
- L a k o f f , G e o r g e (1 9 8 7)
Women, fire, and dangerous things.

Chicago: The University of Chicago Press. [池上嘉彦・河上誓作他訳 (1993)、『認知意味論』、東京：紀伊国屋書店。]